紙上講座 ―

百年ほど昔、沢入駅から賽の河原への道々の記 その2

～岩澤正作氏著『渡良瀬川峡内澤入塔見聞記』より～

講師 藤井 実さん（東町花輪）

引き返して二・三十間進むと、賽米の塔の沢から流れくる支流にあう。

上方十余間所の両崖は削られたようにそびえ谷の入り口を作り、その間に河水が流れて瀑布を作っている。

その高さ約三間ほどであるが、見てみる価値がある。これを地元では「般若の滝」と呼ぶ。

般若瀧から寝釈迦

般若の滝の下流をわたり、塔の沢川の右岸に沿って進むと、右の支流が流れ込む。

本流を渡り支流に沿って少し上がると岐路があって「右、楡沢、足尾道。左、釋迦及び塔の沢道、三丁」と記されている。

是より間道楡沢へは一里とちょっとと聞く。

左折して急傾斜の道を上り切ると、左側に巨岩がそびえ立っている。高さ三丈ほど。岩の前方は直に塔の沢の谷に落ち込んでいる。

岩の横腹を削って道筋をつけ、ハシゴ・鉄鎖を懸け、これを上り切ると岩上に着き、釈迦の仰臥する像が刻してある。これが「寝釈迦」である。

像は巨岩の上に陽刻されており、写真も拓本も不可能である。

全長一丈二尺六寸、顎より頭に至る二尺五寸、耳長一尺三寸、巾五寸手頸より中指の先まで一尺一寸二分、手巾六寸五分、足巾七寸、台部頭分巾六尺餘、足部巾三尺餘、長さ一丈四尺五寸ばかりである。

岩の前方にはベニヤシホが咲き乱れ、足下にはヤマザクラが満開である。

北約十度ばかり西には一つの尖った峰を望むことができる。その西端に突出する岩を字サルクラと呼ぶという。

これらを西二子山ということを知った。山腹にはベニヤシホが咲き乱れすばらしい景色だ。

南側の谷を隔てたすぐ向うに、いわゆる「沢入塔」がひときわ高くそびえている。

釈迦の像はセイロン島のものと寸分違はぬと案内人は説明してくれた。

像は、以前人工的に刻されたものだが、念仏婆さんなるものが、石工に加工させたと聞いたことがある。

沢入塔は、天狗が小田巻きの淵から運んだもので上部から運んでは次第に積んだもので上部より下部の方が小さいと云はれているが、事実はことなる。

寝釈迦から沢入塔を見ると、多重塔形をなし、上部から六層目が最も大く、其の下部が小さくなっているように見える。

これは賽米の塔と同様に、節理によって裂け、周囲も次第に崩落して中心だけが残ったものである。

このように地学的に解剖すると、なんの不思議もないが、めずらしい眺めであることにはちがいない。ことに人工物ではなく、自然物であることに、一層の価値があるのである。

澤入塔から賽之河原

寝釈迦の岩より左折して谷をわたり、右岸に出て一丁余り行くと、澤入塔の下に着く。板片に「一見卒塔永離三悪道苦。高五丈八尺餘巾九尺、此の直上坐像釋迦如來、十六羅漢を安置す」記している。

直上はスグ上のことで塔のてっぺんではない。右側山腹には釈迦及び羅漢数基を見ることができる。

附近に、ネコノメソウ、フタバアオイ、ヤグルマソウ、ホソバノアマナ、シゝガシラ、コウヤノマンネスギ等が見られた。

釈迦岩に戻り、その下から左岸に沿って賽の河原に向かって山道を上る。時に十一時。

道端には、エンゴサク、ホソバアマナ、ユキザサ、クロクモイワハタザオ、シロバナエンレイソウ、キバナホトトギス等が見られた。

二十分余り進み、左岸に移ると、地盤は古生層となり其の石ころが道に散乱している。

この辺から道らしき道はなく、水ぎわに沿って進む。

少しばかりして谷は二股に分かれ小さな滝がある。

左側の山腹を上り草原に出る

五月二十日というのに草木は未だ芽がではじめたばかりで蓮華ツツジのように蕾は固く閉じられている。唯ショウジョウバカマが美しく咲いている。

山腹の草原を西北に向かって足にまかせて上るので、こうした道に馴れていない原田氏には気の毒であったが、熱心な氏は悠々あせらず登られるのには敬服のほかなかった。

思い返すと先ほどのサルクラ辺りには八盥ツゝジが咲き美しい景観であった。

しかし、今歩いている先は一様に果てしない枯草原で何等の景観もない。強いてというなれば、青葉の景観が急変して、枯野となったと所に趣きがあるというだけだ。

しかも、急勾配の山腹をたどるのに加えて霧さえたちこめ始めた。空腹を堪えようやく「賽の河原」に着いたのが十一時五十分。登ってきた枯れ野の道々のあちこちに、古生層の岩塊が露出していたが、ここには溶岩塊が積み重なっている

附近の地は一面イバラで覆われているが、ここのみが不毛の地である。木こり・猟師といえども不可思議に思うのは當然のことだ。

空海がここに来たかどうかはわからぬが、方便に使ったのも理由があると感じないわけにはいかない。

ここにくる善男善女は、石ころをうず高く積んで餓鬼道に落ちた魂を供養する。

あいにく薄い霧がかかってきて視界が悪くなり、やっと北三十度ほど西に袈裟丸山、西南に栗生山が見えるばかりだ。

この山の向こうには赤城山がそびえているはずだが、ただ南方に長い裾野を認めただけである。

釈迦岩のふもとの板書に「賽の河原へ十丁、ツツジの展望絶佳」とあったが、霧がかかってなにも見えないので、かの板書はなくてもよかったのではと、原田氏はこぼした。併し私としては大に得るものがあった。

私は大正十年の九月十八日案内してもらい餅ヶ瀬から西二子の西原に出て、袈裟丸山に登ったことがある。

また、大正四・五年の頃は飯野串峠から尾根づたいに袈裟丸の中腹まで登ったことがある。

これらの経験を併せ考へると、地形や地質又植物分布について納得することができた。

西二子の北裾にもここと同様に熔岩の石ころがゴロゴロしている所がある。この熔岩魂は袈裟丸山火山最後の噴出物に相違ない。

次回は「下山路と小田巻きの淵」